

パブリックスペースに関するフィールドワーク報告

—居場所をつくる サイト・リノベーション—

杉浦 久子・木村映理子

A Report of Various Field Works on Renovation of Public Spaces

Hisako SUGIURA, Eriko KIMURA

This paper reports on various field works of Sugiura's laboratory on renovation of public spaces.

Our laboratory has carried out architectural studies and field works for joining together human beings and space. We transformed dead spaces into living spaces with "Installation" which is a sort of contemporary art. We show separate various projects comprehensively and explore our future potential possibilities for the renovation of public spaces.

■はじめに

研究室では、建築の立場から人と環境、場所の関係をテーマに研究や設計活動、フィールドワークを行ってきた。本稿では今まで行ってきた主なフィールドワーク、並びにこれらに関して別々に発表を行ってきたもの注1)を「パブリックスペースに関するフィールドワーク報告—居場所をつくる サイト・リノベーション—」としてまとめ、報告するものである。

右(表1)に1995年から2004年までに研究室で行ってきた主なフィールドワークの年代、プロジェクト名、参加フレーム、場所、主催者、許認可対象、出版及び掲載記事について一覧を示す。

■フィールドワークの背景と経緯

私たちが日常、空間で生活しているときには、建築も町も、連続的に空間体験している。個別の建物のみならず、繋ぎの空間も面白くなると町は活性化しないのではないかと、との思いからこのような活動に着手することとなった。

スクラップ・アンド・ビルドの時代から、既にあるストックを見直してゆく時代へと、変移する中で、当たり前のものでそこに存在している建築のみならず、様々な既存空間の質を再発見し、顕在化させ、新たな場をつくりだすことも、建築的命題であると考えている。また、既存のパブリックスペースや、場所の問題を考えることは、まちづくりとしての意味を持つかと思う。

社会のインフラの大半が整えられた今日では、単に建てることのみならず、既存にあるものに加えることや差し引くこと、変更することや、積極的な意味において建てないことなど、場所に建築物を建てるという行為そのものや、既にある場所の意味を見出し、建築物だけでなく人を含む空間全体に関係づけてゆくような空間環境のつくりにかたや、その方法論が必要になってきていると考えられる。

ここで言うパブリックスペースとは、「文字どおりの公共空間と、私有地であっても公共性が高いと考えられるスペース」を指す。ポテンシャルは高いが、あまり活用されていない場所を活性化させ

報告	実施	年代	プロジェクト名	参加フレーム	場所	主催者 (研究室・後援 除く)	許認可対象	出版・掲載記事
○	■	1995-97	瀬田南地区歩行者空間デザイン「流転の道程」恒久設置	道路新設拡幅工事	世田谷区瀬田南	世田谷区玉川総合支所土木設計係	世田谷区玉川総合支所土木設計係	日本デザイン学会誌「デザイン学研究・作品集」2号1996年4p (p6-p9)
●	■	1998	Nest Net Architecture	コスモス祭	世田谷区昭和女子大学	コスモス祭実行委員会	コスモス祭実行委員会	新建築1999年1月号 (ARCHI-NET欄)
○	■	1999	Picture Communication Kiryu	街と美術の現在景「桐生再演5」	群馬県桐生市内	A.B.C. (Abductive-art Collaboration)	桐生市第一勧銀	街と美術の現在景「桐生再演5」
●	■	2000	トーク・ピース・ケース	世田谷アートタウ ン2000	世田谷区三軒茶屋	世田谷区コミュニティ振興交流財団世田谷アートタウン実行委員会	世田谷区コミュニティ振興交流財団世田谷アートタウン実行委員会 ・キヤロットタワー管理組合	朝日新聞東京版朝刊2000年10月22日付, 新建築2000年12月号, 新建築住宅特集2001年1月号, 2002年度学術講演梗概集F1 p917-p918
●	■	2000	交感ウサギ	取手アートプロジ ェクト2000	取手市利根川沿い	取手市教育委員会, 東京藝術大学先端芸術表現科	アパートナー (宇多川荘) 大家・ゴルフ場管理者	新建築2001年1月号, 新建築住宅特集2001年2月号, TAP2000「Toride Art Project 2000家と郊外をめぐる再発見 (入選作掲載)」
●	■	2001	サイクル・プランツ・プロジェクト	世田谷アートタウ ン2001	世田谷区三軒茶屋	世田谷区コミュニティ振興交流財団世田谷アートタウン実行委員会	世田谷区コミュニティ振興交流財団世田谷アートタウン総合支所街づくり部土木課・商店街	朝日新聞全国版朝刊2001年10月22日付, 関連論文「サイクル・ステーション計画」, 東京都建設局主催「自転車利用促進に関するアイデア募集」(優秀賞), 2002年度学術講演梗概集F1 p917-p918
●	■	2002	蚊帳のウチ	菜の花里美発見展	千葉県おゆみ野	菜の花里美発見展実行推進委員会	都市整備公団・千葉市・自治会・地域住民	朝日新聞全国版夕刊2002年9月17日付, 新建築2002年9月号, SD Review2002(入選作掲載), アートユニバーシアード菜の花里美発見展, 2004年度学術講演梗概集F1 p771-p772
●	■	2003	ユキノウチ	越後妻有アートト リエーションレ2003	新潟県十日町市内	大地の芸術祭・花の道実行委員会	十日町市役所・地域住民	新潟日報朝刊2003年7月25日付, 美術手帖2003年9月号, 大地の芸術祭 越後妻有トリエンナーレ2003, 2004年度学術講演梗概集F1 p771-p772
○	□	2003	Picnic In Daikanyama Mobile Kotatsu	代官山インスタレ ーション'03	渋谷区代官山	代官山インスタレーション実行委員会		代官山インスタレーション'03ガイドブック
●	□	2004	Cocoon Time Project					

●本稿にて報告

○本稿にて未報告

■実施

□案のみ

掲載ホームページ

<http://www.swu.ac.jp/prof/sugura>

(表1) フィールドワーク一覧

る方法として、インスタレーションというアートの手法を用い、地域コミュニケーションや、場をより良く使うことを目的としてプロジェクトを行ってきた。まさに（仮説）空間を設置し「場」に「出来事」を起こすことで、サイトの持っている意味を顕在化させたり、変化させること、いわば「サイトのリノベーション」を行ってきた。様々な場所で、別々に行われてきた各プロジェクトを網羅的に整理、分析してゆくことで、共通する手法のようなものが見出せるのではないかと思う。また、ここから今後の可能性と問題点を導き出してゆきたい。

■居場所の問題からサイト・リノベーションへ

・仙台メディアテーク 1995（写真1）

「仙台メディアテーク」は、早稲田大学教授の古谷誠章氏と行っていたコンペ案（2等案）で、メディアテークという、図書館を中心としてホール、ギャラリー、カフェなどの複合施設が、求められたものである。この案では、様々なこれらの機能をシャッフルして混在させ、空間が、切れつつ繋がる、立体織物のような構成を、考えていた。利用者は、色々な場所から入ってこられて、ふさわしい場所を選んで使えるよう、また、偶然に関係ない人が出会ったり、様々な場の状態が、生まれやすいような空間をつくった。ここでは、建物という物体をつくったというより、色々な居場所をつくった、という感じがしている。

・人の居場所（図1）

人が生活している場、人の居場所は、実に様々な場所がある。

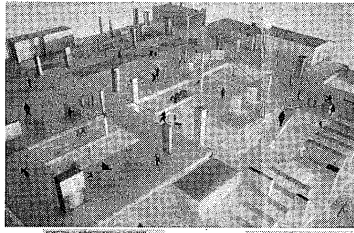
たとえば木陰、駅のホーム、待ち合わせ場所、自分の部屋、川辺、ビーチ、ホテル、カフェ、病院、公園、など自然の場所、都市の中、外部空間、内部空間、建築、インフラ、色々な場所がある。建築も当然この中に入るが、こうした多様な場所すべてが、対象地になると考えている。

・近所の公園（中野もみじ山公園）（写真2）

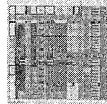
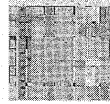
これは、中野のとある公園内である。特別なものではなく、普通の公園であるが、木々が多く植えられ、木立で囲まれたスペースに、テーブルとベンチが3つ設置されている。ここに、季節労働者と思われる人々が、居場所をつくっている。いわゆるホームレスのような、段ボールハウスはつくられていないが、この3つのテーブル周辺は、完全にカスタマイズされ、専用の寝椅子で本を読んだり、ベンチで昼寝をしたり、木陰に洗濯物を干したり、テーブルにガスコンロを置いて、集まって食事をしたりしている。そこでは写真（写真2）のように、ご近所にキャンプ場ができたような感じで、賑わっている。最近ではこれに乗じて、キャンプ用品を持ち込んで積極的に加わる、普通の(?)人も出てきたようである。公共の場のコードを少し逸脱していて、困ったことではあるが、ここにある場所の可能性を、最大限活用してカスタマイズし、心地よさそうな居場所をつくっている点においては興味深い。公園運営のシステムを少し考えなおせば、他の多くの人にとっても可能性のある場所になるのではないか、と思う。

・サイト・スペシフィック（図2）

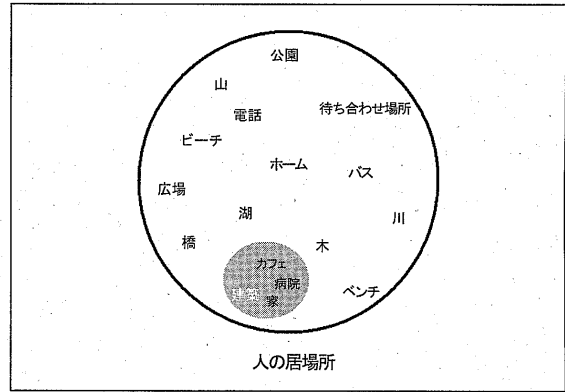
私たちの行ってきたフィールドワークは、サイト・スペシフィックで、みな場所に依存している。場所は、その場所固有のもので、当たり前であるが、2つと同じ場所は存在しない。また、具体的なサイトには文脈、コンテキストがある。これにパラサイトの付け加えたり、囲い込んだりして変容させ、サイトが既に持っているポテンシャルを顕在化させたいと考えている。その結果、たとえば



シャッフルされた空間



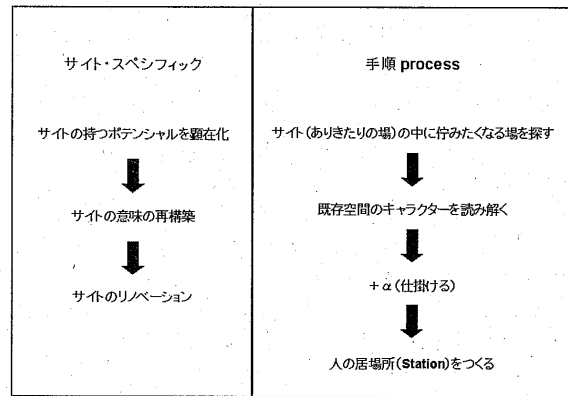
(写真1) 1995 仙台メディアテーク



(図1) 人の居場所



(写真2) 場所の可能性を最大限引き出している



(図2)

(図3) 手順 PROCESS

サイト・スペシフィック

	Nest Net Architecture	交感ウサギ	トーク・ピース ケース	サイクル プランツ プロジェクト	蚊帳のウチ	ユキノウチ	Cocoon
流れる							
	らせん階段	木質アパート	渡り廊下	レンタル サイクルポート	広い遊歩道	共有庭	橋・道・入口付近
とどまる							

(表2) 流れる・留まる (station)

通行のための道でしかなかったところが、部屋のようになったり、多くの場合サイトの意味が変わって再定義される。場所の可能性を発見して、手を入れること、いわば「サイト・リノベーション」を行っているのではないかと考えている。

・手順 プロセス (図3)

私たちのとっている手順、プロセスは、まずありきたりの普通の日常の場所の中に、今はつまらない空間になっているけれど、佇みたくなる、楽しい空間になる、可能性を持っている場を探して、→次に既にあるその場所のキャラクターを読み解いて分析し、→そこに存在している様々なものと共存しつつ、たとえば住民を巻き込むことも含んで、そこにプラスアルファとしての空間的仕掛けを加える、ということである。これにより人々の行為を誘発し、人々のステーションのような、新たな人の居場所、をつくらうとしている。

■【手法1】 流れる・留まる (ステーション) (表2)

(表2)は、1998年から2004年までに研究室で行った主要なフィールドワークを、平面的なダイアグラムで表したものである。渡り廊下「トーク・ピース・ケース」や、階段「ネスト・ネット・アーキテクチャ」、さびしかった遊歩道「蚊帳のウチ」、近所の人々が勝手に通り過ぎてゆく庭先「ユキノウチ」など、本来人々が流れていってしまうのみの空間に、空間的操作を加えることで人々が留まる、ステーションのような場所をつくった。(点は滞留した人を表している)

・トーク・ピース・ケース 2000 (写真3)

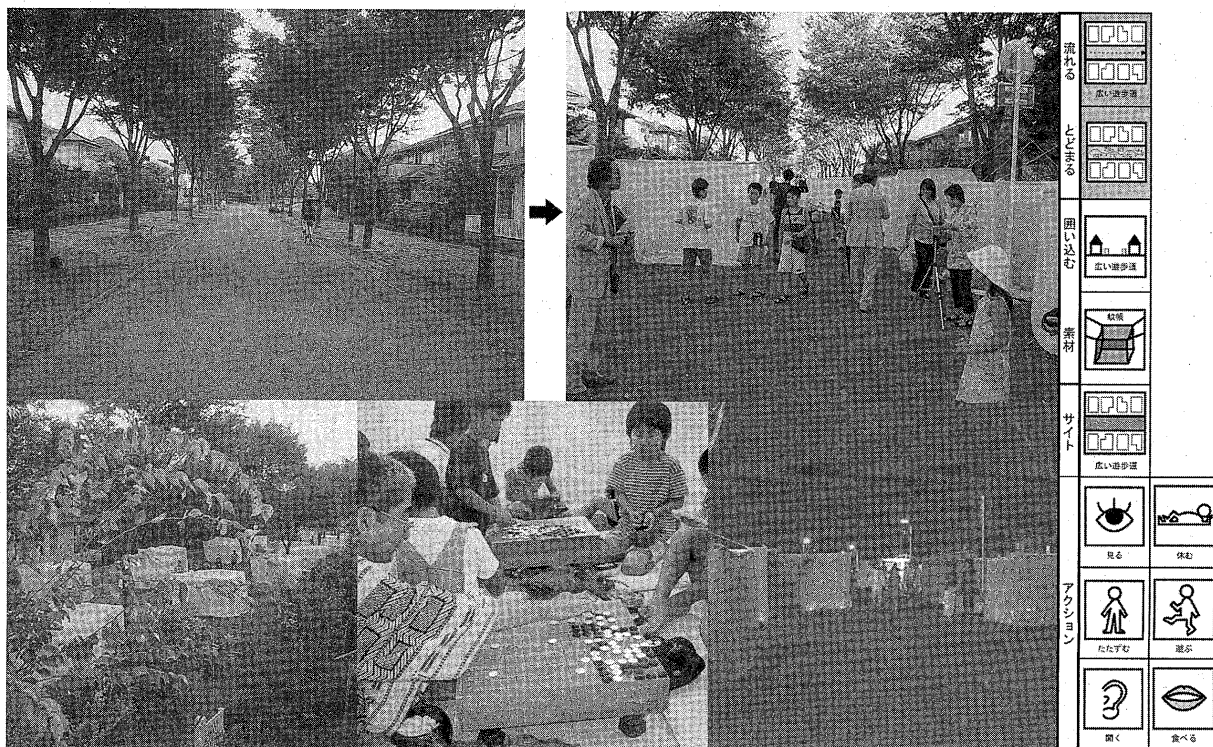
世田谷アートタウン2000、というイベントの参加作品「トーク・ピース・ケース」である。とても良いビューポイントがあるのに、人通りの少なかった渡り廊下が三軒茶屋のキャロットタワー内にある。ちょうど世田谷線の乗り口がこの下にあり、片側は広場が見え、もう一方は世田谷線駅という面白い場所である。この通路の両面ガラスの壁面に1500枚のCDケースの棚をつくり、「三茶の音風景」をこの空間一杯に展開した。三軒茶屋の日常風景をCDジャケットに飾り、音声スキャナー装置を使って、CDケースに貼られたバーコードをスキャンすると、その写真に関係した8秒の音の断片が再生されるようにした。みな、ここに留まってソトの景色を見ながら音を聞いていた。ソトの遠景からは、ニンジンのモチーフにしたので、これもまた世田谷線に乗るために、広場をとおりすぎる人が、立ち止まって眺めていた。写真にあるニンジン型のものは、音声スキャナー装置を、キャロットタワーに合わせて、私たちがアレンジしたものである。

・蚊帳のウチ 2002 (写真4)

これは美術、建築関係のゼミが参加した、「菜の花里見発見展」の参加作品「蚊帳のウチ」である。千葉県のおゆみ野という、ニュータウンにある遊歩道で、きれいで、均質な戸建て住宅が並んでいて、この遊歩道が特徴的であるが、広すぎるためか、気が抜けた感じで、人の気配が感じられない、寂しい空間となっていた。しかし、木立が良い感じだったので、その下に、19張りの蚊帳を張った。蚊帳の中では、近所の住民の方々に、日常生活を行ってもらったというだけだが、多くの人が集まり、立ち寄った。蚊帳の外ならず「蚊帳のウチ」にしたのは、うちの中の気配が外に滲み出てほしかったので、この中では食べたり、寝たり、ゲームをしたり、いろんなことを行い、ストリートに溜りができた。



(写真3) 2000 トーク・ピース・ケース



(写真4) 2002 蚊帳のウチ

■【手法2】 囲い込む（表3）

（表3）は、どのようなマテリアルを使って囲われたような状態をつくってきたか、ということを表したものである。

居場所（ステーション）をつくるのに、完全にその空間を区切ってしまうのではなく、緩やかに、半透明的に、内部と外部が見えたり見えなかったりするような状態をつくりだすことで、ほっと、安堵できる空間が、できるのではないかと考えている。このとき、そのマテリアルは、異なった雰囲気をつくり出すのに、大変重要である。柔らかいトンネル状の、「ネスト・ネット・アーキテクチャ」、数件の家の狭間をネットをつないだ、「ユキノウチ」、繭状のグリーンの、「Cocoon Time Project」など、発泡材、レーザー、CD ケース、植物、蚊帳、ネットといった自然物から人工的なものまで様々な素材があるが、内外の間に、半透明化した空間をつくりだした。

・ Nest Net Architecture 1998（写真5）

フィールドワークの初期のもので「Nest Net Architecture」という作品で1998年のものである。（1998年コスモス祭）学内のデッドスペースである、大学1号館1階の螺旋階段を使ったもので、都会の廃材的なもので編まれた、巣のような空間を作った。網的形狀のものは、発泡プラスチックホームという、いわゆる緩衝材をカッティングしたもので、パソコンなどの箱に、入っているようなものである。勝手に、階段の手すりの間にハマってくれ、風が吹くとポワンと揺れたわむが、すぐに、もとに戻る性質がある。ここにきた人が、もうひとつの廃材である、ビニールの傘袋を編みこんで、補強することによって、形が変形をし、だんだん階段に、巣が完成する仕掛けとなっていた。オープンな通路空間に、巣がパラサイトし、囲まれた感じの、留まれる空間が出現した。

・ ユキノウチ 2003（写真6）

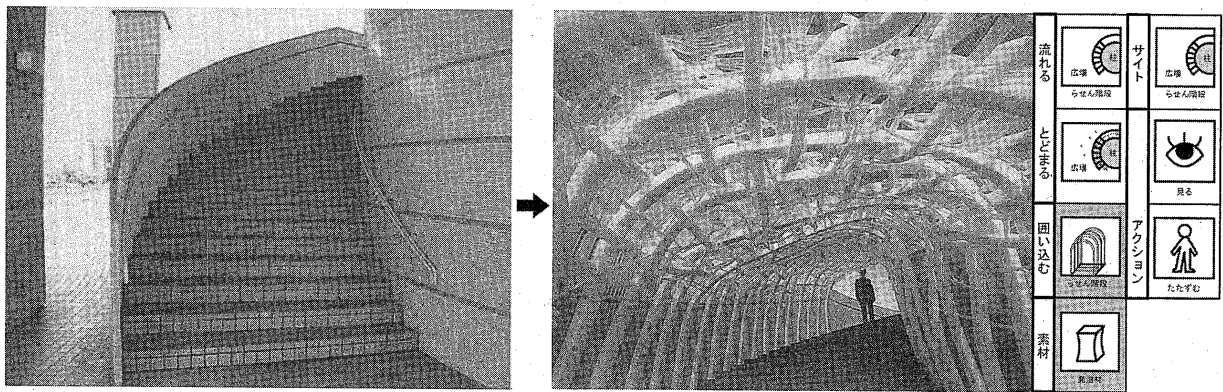
これは、新潟県十日町で、昨年行われた、越後妻有アートトリエンナーレの参加作品「ユキノウチ」である。豪雪地帯の十日町で行ったもので、民家の集まったところである。ここには、雪下ろしのために隣家との間に不思議なスペースがあるが、夏はこのスペースはほとんど意味がない。さらに中庭的空間があり、各家の所有地であるが、隣地との境界はほとんど見当たらず、勝手に庭先を通りぬけている、といったコミュニティがあった。そこで、この間の空間を、ネットで囲うことで、図と地が反転し、外部が内部空間のようになる。夏に、雪の下の空間に潜り込んだような、遠景からは、雪に埋もれた家のイメージが、再現できればいいと考えた。

・ Cocoon Time Project 2004（写真7）

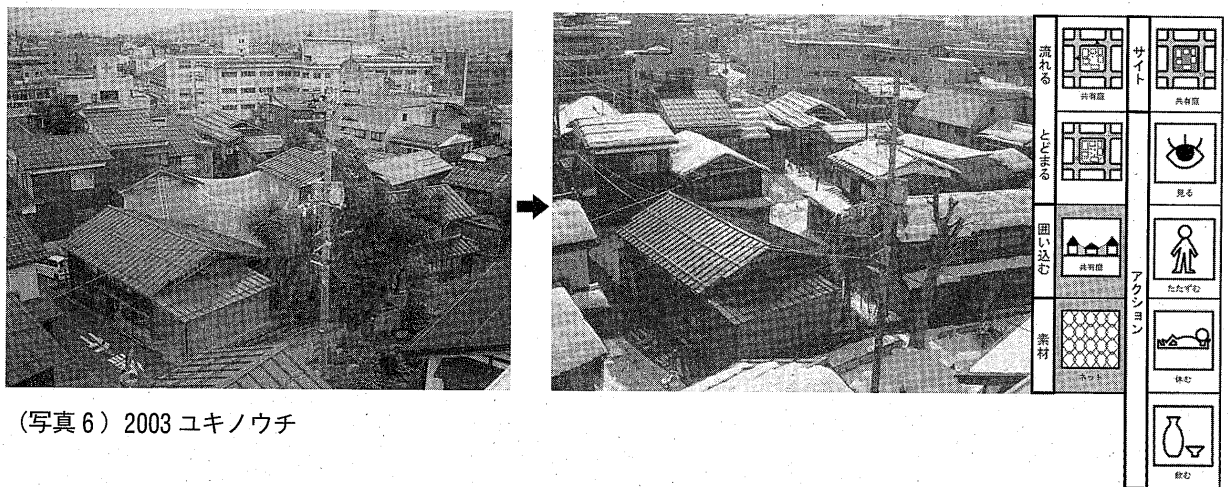
これは、まだプロジェクト案で実施していないが、「Cocoon Time Project」である。ストリートに1人から数人ですごせる、スペースをつくりたいと考えた。それらはコクーン型で、靴を脱いで中に入ると、ガーデンの中にはいったような空間が、実現できたら、と思っている。ほっと和める、内包されたガーデンのイメージで、内側と外側がひっくり返ったようなものになるのではないか。都市の中での様々な現象を観察してみると、マンガ喫茶や隠れ家的カフェバー、靴を脱いで寛げる居酒屋など、リラックスできる場や親密なコミュニケーションがとれる場、ひとりになれる場が、求められているように思える。また、電車の中で化粧する人、携帯電話での通話など、パブリックな場で個人的な行為を行うなど、他人とのあいだに、眼には見えないバリアーができていているように考えられる。

	Nest Net Architecture	交感ウサギ	トーク・ピース ケース	サイクル プランツ プロジェクト	蚊帳のウチ	ユキノウチ	Cocoon
囲い込む							
	らせん階段 発泡材	川辺 レーザー ウサギぬいぐるみ	渡り廊下 CDケース スキヤナー (音)	レンタル サイクルポート ケナフ	広い遊歩道 蚊帳	共有庭 ネット	ストリート 緑
素材							

(表3) 囲い込む



(写真5) 1998 Nest Net Architecture



(写真6) 2003 ユキノウチ

■【手法3】 意味の再構築 (表4)

(表4)は、いままでのプロジェクトがどんなサイトに仕掛けられてきたか、そこで、どのような行為が起ったか、を示したものである。階段、アパート、通路、中庭のようなスペースが、本来の機能に加えて、そこで座る、佇む、集まる、飲食をするなどの行為が加わり、そのサイトの意味が変異し、再構築された。

・交感ウサギ 2000 (写真8)

これは、取手アートプロジェクト2000の参加作品「交感ウサギ」である。研究室としてではなく、筆者とパートナーの杉浦友哉と行ったものである。「家-郊外住宅」という、大きなテーマがあった。これは、取手の利根川の辺りに建つ、木賃のアパートの住人として、人間と等身大の大きさのウサギを鎮座させ、土手を散歩する人の視線と、同じ高さになるようにした。さらに、500メートルの川の対岸、我孫子側からレーザー光線をシューティングして、この窓に当てた。部屋の中では、レーザーの光がとらえた川の水の蒸発する様子が(スペックル)、ウサギのシルエットとともに、ふすまに、炎のように映るようにした。このサイトの条件すべてが、家と関係している状態をつくり、この大きな川と小さな家が、関係していることを、視覚的に顕在化させることで、どこにでもありそうな家が、特異点となったのではないか、と思う。

・サイクル・プランツ・プロジェクト 2001 (写真9)

これは世田谷アートタウン2001の参加作品「サイクル・プランツ・プロジェクト」である。三軒茶屋の駅近く、首都高の高架下にある、レンタサイクルポートである。このような自転車のためのスペースはデッドスペースの活用として、最近良くみられるようになってきた。自転車が700台ぐらゐあるが、レンタルする人はそれほど多くなく、国道246号線の物凄い交通量の中で、空気も悪く淀んだ場所である。実際に1時間もいると、のどが痛くなり、鼻の中が真っ黒になるようなところである。そこで、ここをジャングルみたいな森にしたいと考え、ケナフという、CO₂をたくさん吸収し、短期間で育つ草を、1000鉢、住民の方にも手伝ってもらい、初夏から秋まで約3カ月間、世田谷公園などで育てた。それを自転車から生えたような感じに、荷台やかごに入れ、道路との間に、半透明な緩衝帯をつくった。

・蚊帳のウチ 2002 (写真10)

これは、家の中で行われている様々な行為を、外で行ったというだけのことであるが、お祭のように、何かを売った訳ではないのに、いつのまにか人が集まり、勝手に蚊帳の中に入り、路上で、皆が寛ぎ始めた。ウチで行われていることが、ソトにでて、パブリックな空間に、プライベートな空間が、半透明な蚊帳で、やわらかく仕切られて、見え隠れしたことで、見えなかった個人の顔が、見えたように思えた。公共の場というサイトの意味が、セミプライベートなものに変わったと考えている。

遊歩道の蚊帳の中では、化粧、休息、ルームランナー、お茶飲みなどのような行為が行われていた。これに必要な家具などは、みな近くの家からお借りし、その家の主には、1日この中にいていただいた。囲碁の蚊帳には、行列までできた。休憩の蚊帳は、誰にも主はお願いしなかったが(無人)、クッションを置いていたら、通りがかりの人が昼寝をしたりして寛いでいた。



(写真7) 2004 Cocoon Time Project

	Nest Net Architecture	交感ウサギ	トーク・ピース ケース	サイクル プランツ プロジェクト	蚊帳のウチ	ユキノウチ	Cocoon	
サイト	 らせん階段	 木質アパート	 渡り廊下	 レンタル サイクルポート	 広い遊歩道	 共有庭	 橋・道・入口付近	
アクション	 見る	 見る	 見る	 見る	 見る	 聞く	 見る	 見る
	 たたずむ	 たたずむ	 たたずむ	 たたずむ	 たたずむ	 食べる	 たたずむ	 たたずむ
			 聞く		 休む		 休む	 飲む
					 遊ぶ		 飲む	

(表4) 意味の再構築

・ユキノウチ 2003 (写真11)

十日町中心部、本町通りは、雪国のためアーケードがあり、よくある、地方都市の景色である。近くの国道沿いに、大型店ができ、きものの街として、有名ではあるが、商店街は寂しくなっている。この通りから一歩中に入ると、ランダムに並んだ、古い民家の佇まいがある。雪に埋もれてしまうため、2.5階ぐらいの高さがある。間に、雪下ろしのための空隙があり、細い路地とともに、独特の景観をつくりだしている。数件の民家で囲まれた私有地である中庭を、町に開いて、家々で囲まれた、公園のような空間にしたいと考えた。毎日、物干し台に座っていたおばあさんと、都会からここにやってきた人の間に、たくさんの会話が生まれた。ネットで囲まれたところに、かがんで入れるくらいの入り口を開けたので、少し入りにくくなっていて、セミパブリックな空間が生まれていたと考えている。

■【手法4】 居場所を皆でつくる

私たちのフィールドワークの多くは、そこにいる人たちと、なんらかの形で、いつも関わっている。また、すべての作業は、自力建設で行ってきた。たとえば、「サイクル・プランツ・プロジェクト」においては、ケナフを種から育てるために、2トントラックで土を運んで、1000鉢のプランターに植えて、夏中、公園の片隅で水遣りをしたり、「蚊帳のウチ」では蚊帳の補正作業のために、現地でミシンを調達して、徹夜で19蚊帳分縫ったりした。「トーク・ピース・ケース」では、4メートルの木材を、劇場の工作室をかりて切断し、上階まで人力で運んだり、研究室の学生を中心として様々な形で関わっていただいた方たちの協力のもと、専門業者などに依頼することなく進めてきた。

・住民参加プロジェクト

住民の方たちと企画の段階から深く関わって行われた2つのプロジェクト（「蚊帳のウチ」、「ユキノウチ」）について、企画立案から開催までのプロセスを時系軸上で整理し、その具体的な流れと実践内容を示す。まず主体である実行委員会（中心はアートフロント）との関係や、地域住民との関わりなど「人との関係性」、場所の読みとり、企画立案から制作までの「作業のプロセス」、「イベント全体の動き」と「研究室のプロジェクトの動き」の関係を流れ図とした。（表5・6）

・各プロジェクトの概要

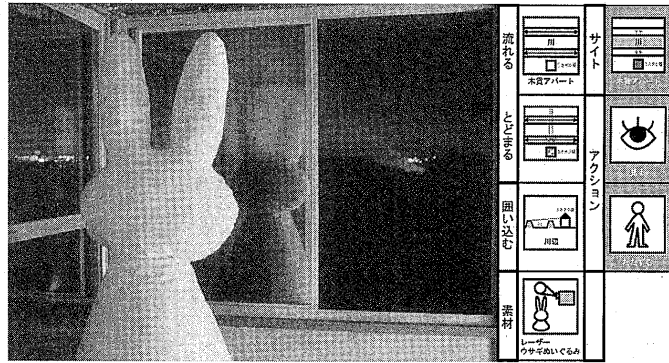
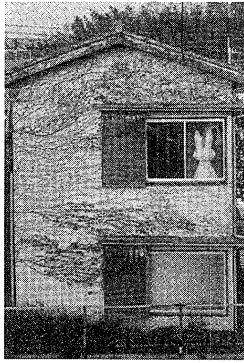
「蚊帳のウチ」を行った「菜の花里美発見展」は、千葉の4つのベッドタウンとして開発された郊外住宅地を舞台に建築、美術系の22大学38ゼミが参加した。新住民がいないなど、問題を抱える地域に各ゼミは入り、住民と関わりながらプロジェクトを進めた。場所の選定は各ゼミの希望によるものであった。

また、「ユキノウチ」を行った「越後妻有アートトリエンナーレ2003」は、新潟県の6つの市町村が参加する、2000年度から始まった国際的な3年大祭で、私たちには十日町市、というフレームは与えられていた。

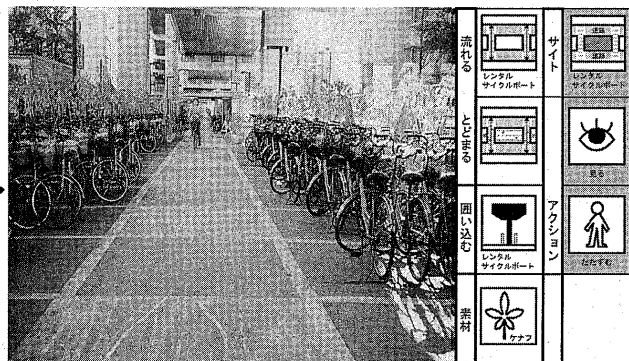
・各プロジェクトの流れ

蚊帳のウチ in 千葉県おゆみ野 2002 (表5)

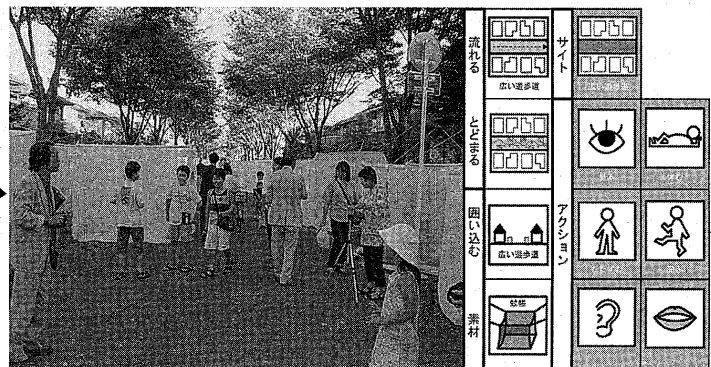
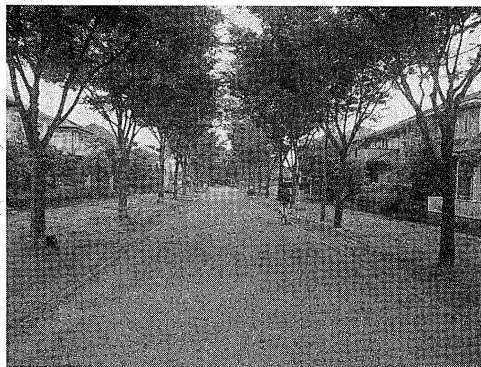
2002年2月に、アートフロント側から「菜の花里美発見展」の企画趣旨などに関する説明会があり、3月に千葉県おゆみ野、ちはら台、季美の森、あすみが丘のニュータウンの見学会が行われた。4月に全体会議があり、研究室ではおゆみ野の遊歩道に場所を選定した。その後、4月末におゆみ野地区



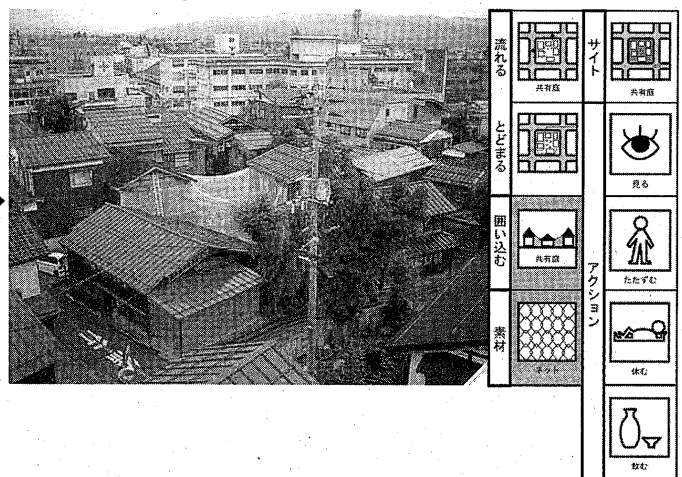
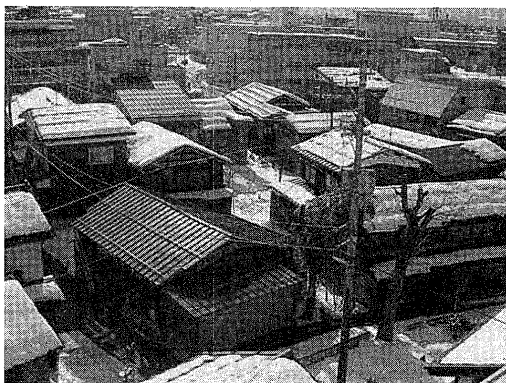
(写真8) 2000 交感ウサギ



(写真9) 2001 サイクル・プランツ・プロジェクト



(写真10) 2002 蚊帳のウチ



(写真11) 2003 ユキノウチ

の第1回住民説明会が開かれ、第1案の企画案を提出した。おゆみ野地区の関係14ゼミと住民が参加したが、地域の自治会メンバー（少数派）の猛反対にあい、混乱したが、自由な立場の住民に支えられて開催されるに至った。この後住民説明会や打ち合わせを2週間毎に行い、5月に「蚊帳のウチ」という第2案目が決定した。管理者（公団）から歩道の許可が出た後、近隣の小学校に広報などの協力依頼にいったが断られる、といったこともあり、すべての自治会関係者などの理解が得られたのは8月の会期寸前であった。その後も2週間毎に住民説明会並びにワークショップを継続し、制作の多くは現地で行ったために、住民との協働関係は濃密なものとなった。特に主婦の方たちの強力なバックアップが得られ、企画段階から協働体制が生まれた。他の住民への理解や、呼びかけなども積極的になされ、その結果、遊歩道は多くの住民で賑わいをみせた。並木に実際の蚊帳を19張り、毎週末出し入れする作業や、蚊帳のウチの道具や主も、皆住民の協力のもと、実現したと思う。

ユキノウチ in 新潟県十日町 2003 (表6)

2002年12月に、十日町で他の参加作家たちとともに見学会があり（主催アートフロント）、中心市街地を回った。使用許可地として、メインストリートに面した空店舗や空き地などが紹介されたが、通りから脇道に入った民家の街区が雪国独特な空間性であったため、2003年1月に雪の中、再度見学した上で企画立案し、場所の希望を提出して、市の職員の方の協力体制も得られた。（道路の使用許可など、条件付きで許可される。）3月に東京でアーティストミーティングが開かれ各自のプランを提出した。4月に予定地の8軒の民家（私有地）1軒1軒に研究室の学生と企画の説明と使用のお願いにゆき、許可をいただいた。（2軒は拒否。）その後、5月に測量などのサーベイを行い、6月に現地のお宅で住民説明会を経て、地区の会館などで私たちが制作を行い、設営作業や運営などは住民の方たちと協働で行い、積極的な協力が得られた。私有地がパブリックに開かれる企画であったため、住民の理解なしには、実現し得なかったものである。雪下ろしの経験を生かし、危険な高所作業など、設営作業は大方が住民の手で行われ、会期中の運営は協働運営体制であり、他地域からのたくさんの来場者とのコミュニケーションは、住民が自発的に行っていた。

■各手法のまとめと可能性

【手法1】流れる・留まる（ステーション）

人が流れていってしまうのみの寂しい通路的空間に空間的な操作を加えることで、人が留まるステーションのような空間をつくる。 → 人が滞留することで賑わいが生まれる。

【手法2】囲い込む



滞留する空間、居場所をつくるために半透明的なマテリアルで囲い込む。 → 居心地の良い安堵感が生まれる。

【手法3】意味の再構築

場所の持っていた本来の意味を顕在化させたり、更なる意味を付加、または変容させたりする。
→ パブリックな場がセミプライベートな空間になったり、プライベートな場がセミパブリックに開かれたりする。

【手法4】居場所を皆でつくる

部外者の視点がかえって地域の問題や特性を顕在化できる。 → その場にある様々なストック（人、もの、空間、環境）を積極的に利用することにより、場所の特性が顕著に現れる空間となる。

おゆみ野「蚊帳のウチ」プロジェクトの流れ			
	研究室の動き	全体の動き	写真（作業工程～完成）
2月	●企画会議（方向性）	●○企画説明会	 ニュータウンの閑散とした遊歩道（夏の道）
3月	●企画会議・現地見学	●○現地見学会	
4月	●企画会議（第1案企画案）	●○全体会議	 企画会議「どんな人が住んでるのかな？」
		●○☆住民説明会（4/27）	
5月	●○☆住民説明会（5/13・5/27）	●○☆住民説明会（5/11・5/16）	 おゆみ野で住民説明会
	●○実行委員会と打合せ	●☆住民会議	
	●企画会議（第2案企画案）		
	●○☆場所使用許可		
6月	●企画決定（レビュー準備）	●☆住民会議	 一本一本幹の太さと間隔を実測調査
	●図面模型制作	●○ゴミ拾い	
	●☆住民説明会（6/7・6/15）	●○企画決定	
7月	●☆ワークショップ	●☆住民会議	 地元の小学生を集めてワークショップ
	●☆小学校へ企画説明	○◎☆住民・公団打合せ	
	●☆現地リハーサル（蚊帳吊り）	●○東京レビュー	
	●☆現地作業（縫製など）	●○☆地元お披露目パーティー	
	●☆用具調達		
8月	●☆広報		 既製の蚊帳を屋外で張れるように切断、縫製作業は続く
	●☆撤入・設置・展示・撤収（3回）	●○☆オープン	
9月	●○☆反省会	●○☆ファイナル	 脚立を使ってグループ（住民+学生）ごとに蚊帳張り
	●展示会		
11月	●学内展示		 「蚊帳のウチ」では囲碁を囲む住民と来訪者が日常生活を楽しむ
12月	●会計報告		
凡例)	(主催) ●昭和女子大学生生活環境学科杉浦研究室		 19の蚊帳が張られ、賑わいを生んだ夏の道。
	○菜の花里美発見展実行推進委員会		
	(協賛) ◎都市整備基盤公団		
	(協力者) ☆個人協力者（地域住民等）		

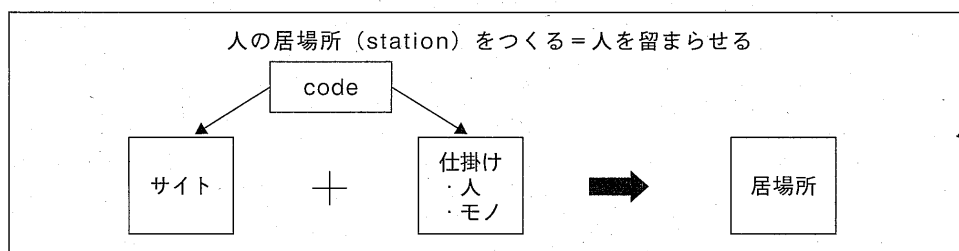
(表5) おゆみ野「蚊帳のウチ」プロジェクトの流れ

■コードの問題

サイト+仕掛け⇒居場所 (図4)

フィールドワークでは、人の居場所、ステーションのような場所を、様々なサイトに仕掛けを施すことで、つくってきた。ゲリラ的に、やりたい場所を皆で見つけて行ってきたが、当然のことながら、ここで大変なことは場所や仕掛けるものに対しての様々な許可を得ることである。(実際の町などで活動を行っている多くのアーティストも、この点に関して皆苦労している。注1-1)) たいていの場合困難なところから始まるので、根気強く説明して、許可や合意形成が得られるのは、会期ぎりぎりになったりすることがほとんどである。実際に、ひとつのプロジェクトにかかるエネルギーの半分以上は、こうしたコードとの戦いに費やされていると言える。パブリックな場所が多いので、多くは、まず役所などの公的機関、あるいは住民の方たちがその対象となるが、こうしたゲリラ的活動(?)が、あちらこちらで起れば、ひとつひとつはささやかな、サイトのリノベーションであるが、もしかしたら、なにかボトム・アップの方向から、町や地域が変わってゆくのもかもしれないと思う。

今まで様々な場所でインスタレーション的に仮設的な空間を設置してきたが、ここから地域住民の意識が変化し、自分達の生活する環境に対して、積極的に関わってゆこうとする態度が顕著にみられるようになった。私たちはそのお手伝いをしているに過ぎないが、できれば同じ地域で継続的に深く関わってゆければ、住民の意見を反映した、本当の意味でのサイト・リノベーションとしてのまちづくりになると考えている。












(図4) 人の居場所 (station) をつくる

注1-1) <カフェ・トーク31> ディレクター 川俣正 (美術家), 川俣正×杉浦久子 2003 11/14 於: 昭和女子大学プレリユード

注1-2) <リノベーション・スタディーズ15> ディレクター 五十嵐太郎 (建築史・建築批評家), 彦坂尚嘉 (美術家)×池田修 (PHスタジオ/BankART 1929)+村田真 (美術ジャーナリスト)×杉浦久子 2004 7/31 於: <BankART 1929> YOKOHAMA (「居場所をつくる-サイト・リノベーション-」 杉浦久子)

注1-3) 「パブリックスペースの有効利用に関する研究 (その1) 世田谷アートタウンにおける実践-インスタレーションによるまちづくり-」 杉浦久子, 河野ひろみ 2002年度学術講演梗概集F1 p917-p918

注1-4) 「パブリックスペースの有効利用に関する研究 (その2) おゆみ野, 十日町でのアートイベントにおける実践-互律するまちづくり-」 杉浦久子, 木村映理子 2004年度学術講演梗概集F1 p771-p772

十日町「ユキノウチ」プロジェクトの流れ			
	研究室の動き	全体の動き	写真（作業工程～完成）
12月		●○現地見学会・打合せ	 繰り返された模型制作
1月	●○現地見学	●○プレスリリース	 模型持参し、住民説明会
	●○◎企画会議（道の使用許可）	●○アーティストミーティング	
2月	●企画会議・サーベイ	○◎☆住民・関係者打合せ	 業者さんから縫製方法を習得
3月	●企画会議・サーベイ	●○アーティストミーティング	
4月	●○☆企画説明（使用願許可）	○広報ブース出展	 現地で徹夜続きの縫製作業
	●企画会議・模型制作		
	●○プラン提出		
5月	●企画決定	○サポートスタッフ全体会議	 住民と共にネットを民家へ設置
	●サーベイ・模型制作	○インフォメーションセンターオープン	
6月	●☆住民説明会		 ネットは巨大だった
7月	●現地作業（縫製など）	●○☆オープン	
	●☆設営		
	●広報		
	●☆展示（「蚊帳のウチ」参加住民見学）		
8月	●☆展示		 湧出る名水を早朝汲みに行く
9月	●☆展示	●○☆ファイナル	
	●☆撤収		
	●☆反省会		 空と地の間に張られたネット
11月	●学内展示		
12月	●会計報告		 住民と共に撤収作業
2月	●☆十日町雪祭り参加		
凡例	(主催) ●昭和女子大学生生活環境学科杉浦研究室		 みんなで打ち上げ
	○大地の芸術祭・花の道実行委員会事務局		
	◎大地の芸術祭・花の道実行委員会十日町市役所		
	(協力者) ☆個人協力者（地域住民等）		

(表6) 十日町「ユキノウチ」プロジェクトの流れ

(すぎうら ひさこ 生活環境学科) (きむら えりこ 生活機構研究科生活学科研究専攻生)